

京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻言語学専修
GÛR GD'YEM Mjesd'alpa (PENG Zitong)
shito712@gmail.com

【要旨】チベット＝ビルマ諸語における多くの言語は能格的特徴をもっていると、一般的に考えられている。しかし、多くのチベット＝ビルマ言語には、一部の S¹ (自動詞文の主語) に A (他動詞文の主語) マーカーで標記するような、能格性に反する言語現象が存在する。その中、一番東で話されているチベット＝ビルマ語であるビジ語にも、このような非対格的な格配列と、能格性の規則を越える現象が存在する。さらに、ビジ語には有生性階層により、格配列が分裂する現象も存在している。そして、ビジ語のこの分裂現象は、分裂能格性の特徴に反して、分裂活格性の特徴に一致している。ビジ語が分裂活格的な言語であることから、チベット＝ビルマ言語の中、ビジ語に似た能格性に反する特徴を有する非対格的な言語は活格的な言語であるという可能性を示唆する。

1 はじめに

1.1 ビジ語

ビジ語 (Bdřit'z'a /b'dʒi.sa/、中国語簡体字：毕基语) とは、中国南西部、雲貴高原の東端に暮らす土家族 (Bdřitmi /b'dʒi.mi/) が使用している 2 種類のチベット・ビルマ語の一つ、もしくは 1 つのブリト語 (Brit² language) の 2 つの方言グループの一つである。もう 1 つの「方言」となるムズ語 (/ˈmdzɪ.ho/) とはまったく意思疎通ができないため、本稿では 2 つの言語として見なし、ムズ語は扱わないこととする。

ビジ語は地理上阻まれ、一千年以上独自で発達してきたため、チベット＝ビルマ語の中での位置づけが未だに定論に至らないが、近年の研究では、羌諸語に近い (Zhou 2020)、もしくは羌諸語の一種 (何 2003) だと主張されている。基礎語順は APV で、AP の位置は入れ替えられる。形容詞・数量詞は名詞の後ろに、指示詞・限定詞は名詞の前に出現する。

① Křási=gos	K'oši (kû-)bwout.	② ŋ'é	šipa	a-šik-pa	rak=p'i
ʃsəçi=go(s)	'k'hoçi (kə-)bəw.	ŋe	'jipa	a-'jix-pa	rax=p'hi
PSN=A	PSN (PFX-)kill.PST	1.SG.GEN	clothes	POL-new-SFX	one=CLF
「チュシがコシを殺した。」		「私の新しい服一着」			

1.2 格配列

格配列 (Morphosyntactic Alignment) というのは、人間言語に存在する項の間の構文パターンである (柴谷 2002 : 12~13)。この中、自動詞と他動詞の S/A/P 3 つの項の間での格配列に関して、S と A を同じ格で標示し、P だけを別の格で標示する格配列は対格的格配列と、S と P を同じ格で標示し、A だけを別

¹ 本稿では、項について、Comrie (1989) の用語を使う。自動詞単一の項を S (Subject) ; 他動詞の動作主項及び文法的にそれと同じ振る舞いをする項を A (Agent) ; そして、他動詞の被動者項及び文法的にそれと同じ振る舞いをする項を P (Patient) で表記する。

² 「Brit」は中立的な立場から、ビジ語の「Bdřit/b'dʒi/、/bi'dʒin/、/tʃ'iri/」とムズ語の「/mdzɪ/」のどちらではなく、筆者により推定した祖型を用いた名称である。

の格で標示する格配列は能格的格配列と、そして、Sに分裂があり、Aと同じ格で標示するSaとPと同じ格で標示するSpが存在しうる格配列は活格的格配列と定義される。

1.3 格配列の分裂

1つの言語の中に、違う時制・節・叙法などで違う格配列を成す現象が存在する。ディクソン(2018)は、能格の分裂が生じる条件について、以下の四つのパターンを列挙した：

- (1) 動詞の意味(活格性)
- (2) 中心的な名詞句の意味(有生性階層)
- (3) 節の時制と、或いはアスペクトと、或いは叙法
- (4) 節の主節と従属節の立場

(ディクソン 2018 : 87)

(1)は後ほど活格性という格配列と主張され、また、活格的格配列にも能格的格配列と同じく分裂現象が存在すると指摘された。特に、柳田(2014 : 125~126)は、「分裂能格(split ergative)言語では、名詞階層のある地点で能格が現れれば、それより低い名詞は能格で表示され、それより高い名詞は対格型をとる…名詞階層のある点で活格が現れる言語はそれより高い階層は活格表示される。」と、有生性階層における分裂について、能格的言語と活格的言語には決定的な相違が存在すると指摘した。

2 ビジ語の S/A/P 格配列

2.1 活格性

ビジ語において、Aは、よく gos (具格助詞由来)・do (因格助詞由来)・ré (奪格助詞由来)などの助詞によって標記される一方、Pは常に無標である。Sに関しては、一般的にPと同じく無標となることが多い。

③ Xarébi (ka-)nét-tři.

'xarebi (ka-)ne-'tʃi.

PSN (PFX-)sleep-PERF

「ハレビが寝た。」

④ B'uln'il Xarébi=gos xarébi ró (kó-)vróuň-dól ras.

pʰoN'ni(j) 'xarebi=go(s) 'xarebi rɔ (kɔ-v)'rãN-daw rɛ.

yesterday PSN=A puppy a (PFX-)raise-INCH COP

「昨日ハレビが子犬を飼い始めた。」

しかし、SにAマーカーを付けることもよく見られる。特に述部が移動など動作主の意志性の高い動詞から構成される時、Aマーカーを付ける頻度はかなり上がる。

⑤ Ň'os(ňa=gos) nóltři Pekyĩň=bo íeig-a-fra.

'ŋo(s)(ŋa='gos) naw'tʃi 'petʃiN=bo keɟ'g-a-φra

1.SG.A tomorrow Pekin=DAT go.FUT.1.SG-UNREAL-POT

「私は明日北京に行く。」

⑥ N'os(na=gos) néd-ra?

'no(s)(na='gos) nɛd-'ra

2.SG.A sleep.2.SG-PROG

「君が寝ている？」

もとより、すべてのSにAマーカーが用いられるわけではない。動作主の意志によらない動詞であれ

ばあるほど、A マーカーが付けにくくなる。

⑦ * Ń'os k'ruŋgam-on saig!
 'ŋo(s) 'tʂʰoŋgam-oN 'sajg
 1.SG.A thirst-SFX die.FUT.1.SG
 「私は喉が渴いて死ぬ。」

⑧ Ńa k'ruŋgam-on saig!
 ŋa 'tʂʰoŋgam-oN 'sajg
 1.SG thirst-SFX die.FUT.1.SG
 「私は喉が渴いて死ぬ。」

2.2 有生性階層による分裂

しかし、ビジ語では、有生性階層が低ければ、動作主の意志によらない動詞にも A マーカーが付けられるようになる。ディクソン (2018: 106) は有生性階層 (名詞類階層) について、以下の階層を提示した。

有生性階層 (名詞類階層) (ディクソン 2018: 106)



← O (本稿では P、以下 P を使う) 機能より A 機能でより現れやすい方向

ビジ語の場合、3 人称代名詞から以下の階層³が S である時、1、2 人称代名詞では A マーカーが付けられない動詞でも A マーカーが付けやすくなる⁴。

⑨ *Ń'os nétpɛp tad'ig.
 'ŋo(s) nɛ'pɛ 'tatʰig
 1.SG.A fall asleep cannot.1.SG
 「私が眠れない。」

⑩ A-ma-ra-gos (ka-)nétpɛp tad'i.
 a-'ma-ra=go(s) (ka-)nɛ'pɛ 'tatʰi
 POL-mother-POL=A (PFX-)fall asleep cannot
 「お母さんが眠れない。」

これらの現象から、ビジ語の S は動詞により、Sa と Sp に分裂していることが明らかになった。言い換えると、ビジ語が能格的な格配列より、活格的な格配列に近い特徴を有していることになる。また、例文⑨と⑩で示したように、ビジ語の S/A/P 格配列は有生性階層で分裂が生じている。高い方の階層では活格性を表しているのに対し、低い階層では対格性が強くなっている。この現象も柳田 (2014) で提唱した分裂活格性の特徴に一致している。ただし、能格性ではなく、活格性であると判断するのに、まだビジ語において、すべての S に関して、A マーカーがなくても非文にならないことを説明しなければならない。

そこでさらに観察すると、ビジ語には、助詞の脱落現象が多発する。ビジ語において、助詞などによ

³ 3 人称代名詞から以下の階層において、すべての S に A マーカーを付けることに対する容認度は人・方言などにより意見がだいぶ異なってくる。全体的に階層が低ければ低いほど容認度が上がる見込みであるが、調査が必要となる。

⁴ 付けやすくなるが、一番自然な話し方とは限らない。ビジ語の活格性の有生性階層による分裂はまだ進行中であるという証拠になるかもしれない。こちらも今後の更なる調査が必要となる。

って標記されない限り、APV でしか理解されない。

- ⑪ Ńa ji ra žeg-a-t'i.
ŋa d̄zi ra jeg-a-'t'i.
1.SG rice ART eat.1.SG-UNREAL-DIR.FUT
「私ご飯食べに行く。」

- ⑫ Křáši K'oši (kû-)bwout.
't̄gəçi 'k'hoçi (kə-)bəw.
PSN PSN (PFX-)kill.PST
「チュシがコシを殺した。」

たとえ A が P より有生性が高くても、P が文頭に来たら、A の標記が一切ないと、APV のように理解される。

- ⑬ Ji ra K'oši (ke-)že-ža-t'i.
d̄zi ra 'k'hoçi (ke-)je-ja-'t'i
rice ART PSN (PFX-)eat-UNREAL-DIR.FUT
「ご飯がコシを食べに行く。」

- ⑭ Ji ra K'oši=gos (ke-)že-ža-t'i.
d̄zi ra 'k'hoçi=go(s) (ke-)je-ja-'t'i
rice ART PSN=A (PFX-)eat-UNREAL-DIR.FUT
「ご飯をコシが食べに行く。」

A のマーカーが省略できることから、同じく SaV 構文における Sa マーカーも省略されると仮定する。それで、ビジ語における Sa の無標現象は助詞の脱落により、ゼロ格の Sp と表現上同じになったことになる。

もとより、助詞の脱落とゼロ格の関係について、今までかなり論争があった。例えば、丸山 (1996) では、日本語の「助詞脱落」は「中立的 (無色) な表現であり、ハヤガのような排他性を持たない (丸山 1996: 77~78)」などと論じたように、脱落でも文のニュアンスに影響している。ビジ語においても、A マーカーの有無により、文のニュアンスに違いが生じてくる (ただし、ビジ語においてはトピックマーカーと A マーカーが共存できるため、A マーカーの脱落による文全体のニュアンスへの影響はさらに弱い)。しかし、これらの現象は文法格の 1 つが元々ゼロ格であることとは全く違う段階のものである。

- ⑮ Ń'os=mal nuñbal Zipon=bo gřaug.
'ŋos=me(j) noN'be(j) zi'poN=bo q̄zawg.
1.SG.A=TOP this year Japan=DAT go.PST.1.SG 3.SG
「私は今年日本に行った。」

李 (2023) はナシ語マリマサ方言の助詞使用について詳しく記述した。ビジ語とは対照的に、APV 構文の場合、ナシ語マリマサ方言の助詞脱落に意味上有意な差が生じないことに対して、SV 構文に関して、A マーカーを付けることで、S が事件や動作に対して十分なコントロールを有する意味を表す (李 2023: 18~19)。

- ⑩ [hu³³ nu³³ ŋu³³ se²¹. (李 2023 : 19)
 3 A cry COMP
 「彼がわざと泣いた。」

日本語における「が」も、ビジ語における A マーカーも、有無だけでこのような文の意味を直接に変えるものではない。

- ⑪ Gó (ki-)dřis-pore.
 go (ki-)džis-'porə.
 3.SG (PFX-)weep-PEPR
 「彼泣いた。」

- ⑫ Gó d'ekši (ki-)dřis-pore.
 go t'ex'ji (ki-)džis-'porə.
 3.SG deliberately (PFX-)weep-PEPR
 「彼わざと泣いた。」

- ⑬ Mgos (ki-)dřis-pore.
 'go(s) (ki-)džis-'porə.
 3.SG.A (PFX-)weep-PEPR
 「彼が泣いた。」

- ⑭ Mgos d'ekši (ki-)dřis-pore.
 'go(s) t'ex'ji (ki-)džis-'porə.
 3.SG.A deliberately (PFX-)weep-PEPR
 「彼がわざと泣いた。」

要するに、ビジ語における Sa マーカーの有無現象は、S にマーカーが追加される現象より、元からある Sa マーカーが脱落できる現象であると示唆される。それで、ビジ語の S/A/P 格配列も有生性階層で分裂する活格的格配列となる。

2.3 時制、アスペクトと、叙法、主節と従属節の立場による分裂

なお、節の時制、アスペクト、叙法、主節と従属節の立場による分裂現象はビジ語には見当たらない。

例えば、ブルシャスキ語 (Brushaski) は、A 機能の名詞あるいは単数の代名詞は、他動詞が過去基本時制 (past-based tense) である場合にのみ、必ず能格として標示される。非過去時制では、A、S あるいは P にとって変化語尾はない。同じ語族でも、ネワリ語 (Newari) は、基本的な時制/アスペクト分裂に則ってさらなる変異を見せている (ディクソン 2018 : 123~125)。

ビジ語においては、すべての動詞は、未来・現在・過去・命令 4 つの語根を有する一方、ほかのモード・アスペクトは膠着的接尾辞で実現されている。4 つの語根及び後ろに追加される接尾辞による格配列の変化が見当たらない一方、主節と従属節による格配列の分裂も見当たらない。

- ⑮ * N'os dig-ra.
 'no(s) dig-'ra.
 1.SG.A pain.1.SG-PROG
 「私が痛い。」

②② * Motmon ñ'os t'i-mk're-ri, diug-ra.
 mu'moN 'ŋo(s) tʰi-'Nkʰre-ri, dyg-'ra.
 earlier 1.SG.A DIR-fall down-INF pain.PST.1.SG-PROG
 「先私が転んで痛かった。」

②③ * T'yidus ñ'os nétpeug-ra, n'os bal nétpeud-ra?
 'cçʰidu(s) 'ŋo(s) ne'pøg-ra, 'no(s) bæ(j) ne'pød-ra?
 when 1.SG.A fall asleep.PST.1.SG-PROG 2.SG.A also fall asleep.PST.2.SG-PROG
 「僕が寝落ちた間に、君も寝落ちた？」

3 ほかのチベット＝ビルマ言語との対照

これまで、チベット＝ビルマ言語の格配列に対して、「チベット＝ビルマ語族の多くの言語は能格的特徴をもっている。また、チベット＝ビルマ祖語もこれを持っていたかもしれない(ディクソン 2018:4)」と、一般的に考えられてきた。

しかし、今回取り上げたビジ語のほかに、SにAマーカーを付ける現象は数多くの違うブランチのチベット＝ビルマ語に記述されてきた。

例えば、チベット語における、SにAマーカーをつける現象は、出現環境も働きもビジ語とかなり類似性を有する。星(2010)は、チベット語ラサ方言について、「自動詞が意志動詞の場合は、構文・談話要因によって能格標示を伴う場合がある(星 2010:68)。」と記述している。

②④ náä chin ko. (星 2010:68)

1.ERG 行く AUX
 「私が行きましょう」

同研究にはチベット語ラサ方言のAのゼロマーカー現象の出現条件について、〔背景説明の場合〕と〔会話の中で明らかである場合〕においてtopic化したA項であると論じた。

②⑤ yinää kho yiki shenki yoo maree. (星 2010:74)

しかし 3 文字 知る AUX NEG.NPF
 「しかし、彼は文字を知らないのです。」

要するに、チベット語ラサ方言のS/A/P格配列に関しては、ビジ語と同じく活格的な格配列である可能性が示唆される。

ほかに、羌諸語、ロロ＝ビルマ諸語など、様々な言語にこのような現象が存在しており、言語に応じて、適応条件、範囲、意味論・語用論的働きなどが様々であるが、この現象が広範囲に存在すること自体、チベット＝ビルマ言語の格配列について顧みる必要性を提示した。

4 おわりに

本研究でビジ語の分裂活格性を提唱したほかに、チベット＝ビルマ言語に活格性を有する言語が大量に存在することを予想した。それを検証するのに、今後は違うブランチのチベット＝ビルマ語の助詞使い、特に「助詞の揺らぎ」が多く論じられている羌諸語などに注目したいと思う。これらの言語の格配列を明白にすることで、チベット＝ビルマ類型的・歴史的研究にも役に立つと思う。

謝辞

本稿の作成に当たって、樋口康一、牧秀樹、定延利之、千田俊太郎、Adam Catt、大竹昌巳、秋谷裕幸、塚本秀樹、葉晨傑の各氏から有益なコメントをいただいた。そして、樋口康一、牧秀樹、秋谷裕幸、今泉志奈子、小林洋子の各氏から研究についての有益なアドバイスと協力をいただいた。各氏に深く感謝を申し上げる。言うまでもなく、本稿に残るいかなる誤りも発表者の責任である。また、本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の支援を受けたものである。

略語一覧

A	他動詞の動作主項	P	他動詞の被動者項
S	自動詞単一の項	1	一人称
2	二人称	3	三人称
SG	単数	PL	複数
ART	冠詞	AUX	助動詞
CLF	クラシファイア	COP	コピュラ
DAT	与格	DIR	方向接辞
ERG	能格	FUT	未来時
INF	不定法	NPF	非完了
PEX	接頭辞	POL	敬意接辞
POT	推量法	PST	過去時
SFX	接尾辞	TOP	トピック
INCH	始動相	PEPR	完了進行相
PERF	完了相	PROG	進行相
UNREAL	非現実		

参考文献

- Comrie, Bernard (1989) *Language Universals and Linguistic Typology: Syntax and Morphology*. Chicago: University of Chicago Press.
- Zhou, Yulou (2020) *Proto-Bizic: A Study of Tujia Historical Phonology*. Department of Linguistics of Stanford University. https://github.com/luggroo/bizic/blob/gh-pages/proto_bizic.md [accessed 2023.10.4].
- 柴谷方良 (2002) 「言語類型論と対照研究」生越直樹 (編)『対照言語学』(シリーズ言語 科学4): 11~48. 東京: 東京大学出版会.
- ディクソン・R.M.W.著、柳沢民雄・石田修一訳 (2018) 『能格性』東京: 研究社.
- 星泉 (2010) 「チベット語ラサ方言の格標示形式の体系」『チベット=ビルマ系言語の文法現象 1: 格とその周辺』: 65~93. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 丸山直子 (1996) 「助詞の脱落現象」『月刊言語』Vol.25-1: 74~80.
- 柳田優子 (2014) 「言語類型論からみた上代日本語の主語表示・目的語表示 —「ガ」と「ヲ」と「ゼロ」表示について—」『日本語学』Vol.33-14: 124~137.
- 何天贞 (2003) 「土家语的支属问题」(ブリト語の系統問題)『中南民族大学学报(人文社会科学版)』Vol.23-1: 88~97.
- 李子鹤 (2023) 「玛丽玛萨话的语法关系及标记来源」(マリマサ方言の文法関係とマーカーの由来)『民族语文』Vol.23-2: 17~30.